

# ヴェーバー社会科学の方法（3）

——「社会科学のおよび社会政策的認識の『客観性』」の考察——

Weber's Method of Cultural Sciences, especially of Economics (3)

笠原俊彦

## まえがき

本誌の「執筆要領」における一論文当たりの字数制限が緩和され、わたくしは、(3)、(4)の二論文として予定していた論文を一つにし、(3)として投稿することができた。この論文は、本来、前年度に、論文(1)、(2)とともに一つの論文として掲載されるべく書かれたものである。これらを続けて読まれれば、読者は、この論文の内容をより良く理解されるであろう。

## 目次

### 第1章 社会科学の方法に関する二つの疑問

- 1 科学的研究と政治的「傾向」
- 2 科学における実践批判と認識の客観性

### 第2章 価値判断と科学的認識

- 1 経済学の出発と実践的「技術」
- 2 二つの自然法則における「存在」と「存在当為」との一致
- 3 歴史的相対主義、倫理的進化主義と経験的基礎をもつ「倫理的」科学
- 4 経験科学における価値判断への対応
- 5 理想と価値判断との科学的批判
  - (1) 所与の目的に対する手段の適合性の批判
  - (2) 手段の適合性の確認にもとづく目的の実践的意味の批判
  - (3) 随伴的結果の確認にもとづく意図的行為の批判
  - (4) 価値とこの基礎としての理念との確認
  - (5) 価値と理念との内的無矛盾性の批判

(以上、『九州情報大学研究論集』第11巻、2009年3月)

- 6 価値判断と科学的認識
  - (1) 実践的行動の解明と指示
  - (2) 科学的認識への世界観の作用
  - (3) 世界観と個人の尊厳
  - (4) 科学的研究における価値の伏在
  - (5) 理想からの演繹体系としての科学の誤謬
  - (6) 折衷主義の誤謬
  - (7) 価値判断と科学的認識 — 科学者の責任 —
- 7 科学的研究における価値の明示
  - (1) 科学的研究と価値の明示
  - (2) 価値の明示における思惟と意欲
- 8 科学的議論に対する解放性と自由性
  - (1) 科学的議論に対する解放性と自由性
  - (2) 「性格」、そして「性格」の「傾向」への転化の危険性

## 要 約

ヴェーバーは、実践的行動を解明することとそれを指示することとを区別し、科学がなしうるものは前者のみであることを明らかにする。科学は、行為者に、かれがなそうとしているもの、なしうるものは何か、を示すことはできるが、かれが何をなすべきかを示すことはできない。後者は、行為者自身が自らの理想ないし価値にもとづいて決断すべきことである。

もっとも、理想ないし価値は、科学的認識に対して、第一に、その問題設定に、第二に、事実認識とこの重要性の評価とに作用する。第一の作用は、人間の社会的行動の一つとしての科学的研究の特質であり、ここにおける理想は、科学者に独自の人格とその尊厳とを与え、研究を推進させうる。これに対し、第二の作用は、認識の客観性を阻害しうる。だが、多くの科学者は、このことに必ずしも気づかず、それどころか、特定の理想を実現するための規範の、そしてまた、さまざまな理想の折衷による規範の、体系の形成を、科学的「客観性」の名において意図しさえする。

これに対して、ヴェーバーは、「事実の真理を見ようとする科学的義務」と「自らの理想を擁護しようとする実践的義務」とを明確に区別すること、そしてこの二つをともに果すこと、このことを一人の人間としての科学者の義務として理解する。

科学における問題設定は科学者の理想ないし価値にもとづかざるをえず、しかもまた、自らの理想ないし価値の解明は研究の対象としての理想ないし価値の解明において有用でもある。そのため、科学者は、自らの理想ないし価値を隠すのではなく、逆に、これを解明して、自らおよび読者に明示しなければならない。ヴェーバーは、これを、科学的公正の第一の基本的命令として理解する。さらに、自らの価値の解明と明示とをなすとき、科学者は、自ら

が、どこまでを科学者として語り、どこから意欲する人間として語るかを自覚するとともに、どこまでを読者の知性に訴え、どこからその情緒または倫理に訴えるかを明示しなければならない。ヴェーバーは、これを、科学的公正の第二の基本的命令として理解する。

以上の論述を前提として、ヴェーバーは、かれの雑誌が科学的議論の場であり、このことを理解する限りで、それはあらゆる理想ないし価値を有する人びとに開放されており、しかもそこでは、自由で厳しい科学的議論が許されていること、このことが意図されてきていることを明らかにする。だが、それは、特定の理想を宣伝するための場でも、これを実現するための場でもない。このような場は、他の機関誌によって与えられているのである。

しかしながら、ヴェーバーの雑誌には、実際には、特定の理想を宣伝し実現しようとするある人びとによって自らの理想が害されたと考え、しかも自らの利害を主張する場を他に有しない人びとが多く集まることになり、このことによって、そこには、特定の「傾向」ではないにせよ、ある「性格」が現れることとなっている。ヴェーバーによれば、これは、避け難い結果であり、かれの雑誌の今後の「性格」は、この雑誌への寄稿者の特性とこの雑誌においてとりあげられる諸問題の如何によって決まることにならざるをえない。

## 6 価値判断と科学的認識

### (1) 実践的行動の解明と指示

さて、ヴェーバーは、われわれが以上に述べた、かれのいわゆる技術的批判の第五のもの、しかもその論述の最後の部分、すなわち行為者ないし意欲者が「首尾一貫するためには」「出発せざるをえないはずの諸々の最終的価値基準を自省する手助け」について、また、次のようにいう。

「具体的価値判断のうちに現れるこの最終的諸基準を（行為者に——笠原）意識させること、これが、まさに、科学による価値判断の処理が、形而上学的思弁（Spekulation）の領域に踏み込まずになしうる最後のものである。（これに対して、——笠原）判断する主体（＝行為者——笠原）が、この最終的基準を信奉するべきであるか否かは、かれの個人的問題であり、かれの意欲と良心の問題なのであって、経験的知識（を求める科学——笠原）の問題ではない。」（S. 151.）

すなわち、ヴェーバーは、意欲者ないし行為者に対して、行為者自らが意欲しているものが何であるかを明らかにし示すこと、ここではとりわけ、行為者の価値判断の基礎にある諸々の最終的価値基準としての諸理想ないし諸理念を解明して、これを行為者に示し意識させること、そして、また、このことによって、行為者が自らの最終的価値基準およびこれにもとづく価値判断を自省する手助けをすること、このことを、行為者に対して科学がなしうる最後のこととして認めるのである。

しかしながら、ヴェーバーによれば、ここからさらに一步を踏み出すこと、すなわち、行為者が如何に自省するべきか、またはそもそも自省するべきか、そしてとくに前者についていえば、如何なる最終的価値基準を自らのものとして信奉し、これにもとづいて如何なる価値を設定するべきか、といった決定をなすこと、これ自体は、科学の教えることではなく、行為者が、自ら、その意欲と良心とにもとづいてなす

べきことだ、というのである。

このように、ヴェーバーは、行為者の実践的行動を解明することと、行為者に実践的行動を指示することとを区別する。科学がなしうるのは前者のみであり、後者または実践的行動の決断は、実践的行為者が、自らに対して、または自ら、その責任において、これをなさなければならぬのである。

このことについて、ヴェーバーは、続けていう。

「経験科学は、ひとに、かれが何をなすべきか、を教えることができない。経験科学が教えることのできるものは、ただ、ひとが何をなしうるか、そして——事情によっては、——かれがなさそうとしているものは何か、これのみである」(S. 151.)

すでに明らかなように、ここにヴェーバーのいう「ひとが何をなしうるか」を教えるとは、一つには、何らかの目的としての価値に対する手段の適合性を解明し、このことによって行為者が如何なる手段をとりうるかを行為者に示すことを、とりわけ意味するであろう。だが、それだけではない。それは、さらに、行為者がその理想からしてどのような諸価値を目的として設定しうるか、そして場合によっては、行為者の諸価値からして行為者が如何なる理想をとりうるか、を行為者に示すことをも含むものと考えられなければならない。

また、「かれがなさそうとしているものは何か」を教えるとは、論理的には、「ひとが何をなしうるか」を教えることの前提をなすものであり、行為者が現実<sup>に</sup>に意欲している、さらには意欲していると推測されえ、または推測されざるをえない、諸価値と諸理念とを解明し、さらにはこれらの追求そして不追求がもたらしうる諸々の直接的効果と間接的ないし随伴の効果とを明ら

かにして、行為者がなさそうとしていることの意味をかれが自覚することを可能にすること、このことを意味するであろう。

## (2) 科学的認識への世界観の作用

さて、諸理念および諸価値の解明そして諸手段の解明を、経験的事実の思惟的整序をなす科学の諸課題の一つ、したがって科学者の諸課題の一つ、として理解し、これに対して、このような解明の成果の提示を受けてなされうる実践的行為の決定を、この行為者の自らの課題、として理解するヴェーバーは、他方で、経験的事実の思惟的整序という科学の課題、これ自体が、科学者の個人的な理想ないし世界観そして価値の作用を受けることを認める。

このことについて、ヴェーバーは次のようにいう。

「たしかに、個人的世界観がわれわれの科学の領域に絶えず入り込んで、科学的議論にまで作用していること、この議論を曇らせていること、それが諸事実についての単純な因果的関連の探求の領域においてさえ、科学的議論の重要性の評価を、研究結果が個人的諸理想にとっての好機、すなわち何らかの意欲されたものごとに対する可能性、を減少させるか増大させるか、によって異ならせていることは、認められなければならない。この点では、われわれの雑誌の編集者たちや執筆者たちも、たしかに、『人間離れしていると信じるわけにはいかない』であろう。」(S. 151.)

このように、ヴェーバーは、自らおよび共同編集者たちそして執筆者たちをも含めて、科学的研究に携わる者が、その人間的弱さから、自らの世界観によって作用され、事実の科学的解明ないし議論、そしてこれに関わる評価を曇ら

せうことを認める。

この場合、われわれは、ここでのヴェーバーの論述が、行為者の個人的世界観にもとづく実践的行為と、これを対象とする科学者の科学的解明とが異なることを前提としていること、そして、かれの論述が、このような区別を前提としたうえで、科学的解明に対する科学者の個人的世界観の作用を問題としていることに、まずは注意しておかなければならない。

そして、われわれは、この世界観の作用について、さらに二つのものを区別することができる。

その第一は、科学者の関心とこれにもとづく問題設定とに対する、かれの世界観の作用である。科学者の問題設定は、常に、かれの関心ないし問題意識にもとづいているのであるが、この関心ないし問題意識とはかれの価値であり、その根底にはかれの世界観が存在するのであって、これが問題設定に作用するのである。この意味において、科学者の世界観は、かれの科学的研究のいわば前提をなすことが注意されなければならない。

ただし、この場合、科学者の世界観のこのような作用は、かれが設定した問題に関する事実の解明これ自体を曇らせるわけでは必ずしもない。このことについては、ヴェーバーは、のちに述べることになる。

これに対して、第二は、事実の科学的解明そのものに対する、そしてこの解明についての議論に対する、さらにはこれらについての評価に対する、科学者の個人的世界観の作用であり、この作用は、事実の科学的解明とこれについての議論とを、そしてこれらについての評価を曇らせる。ヴェーバーがここでとりあげるものは、このような作用に他ならない。

思うに、このような作用には、さまざまなも

のがある。これまでのヴェーバーの論述との関連でいえば、このような作用には、とりわけ、自らの理想および価値を、意図せずして、あるいは意図に反して、現実の解明とこれについての議論のうちに不用意に混入してしまうことによる多少とも部分的な当為の主張が含まれうるのである。このような当為の主張は、実のところ、一方における当為の主張と他方における事実の解明との区別を意識的になそうと決意して事実の解明に従事する研究者においてさえ、その人間的弱さから、ときに誤ってなされうることなのである。

そして、また、事実の科学的解明を曇らせる作用のうちには、ヴェーバーが上記引用文において述べているように、「科学的議論の重要性の評価を、研究結果が個人的理想にとっての好機を減少させるか増大させるかによって異ならせること」が含まれる。

われわれの理解によれば、科学的議論を取り扱う際に、さまざまな議論ないし研究結果のうちどれを重要と考えるか、というこの重要性の評価が、個人的世界観によって曇らされること、このことは、研究に直接に携わる者の研究それ自体に作用するのみならず、研究成果としての諸論文のうちから雑誌の編集者がどのような論文をその雑誌に掲載するべきものとして選択するか決定にも作用するのであり、このようにして、編集者としてのヴェーバー等が編集する雑誌の質に関わる。そして、ヴェーバーは、ここで、自らを含む共同編集者たちでさえもが、人間としての弱さをもつことを認め、自らの世界観ないし価値が、意図せずして、さらに、場合によっては意図に反して、論文の重要性の評価に作用する可能性、かれらが、自らの世界観ないし価値に合う論文を選択し、自らの世界観



ないし価値に合わない論文を排除してしまう可能性、を認めるのである。

以上のように、ヴェーバーは、科学研究に携わる者が、その人間的弱さから、自らの理念および価値に作用され、意図せずして、事実の解明とこの議論を、そしてこの評価を曇らせる可能性を認めるのであるが、しかし、かれがこのように研究者の人間的弱さを認めることは、かれが、科学的認識と議論とのうちに当為を紛れ込ませそれを曇らせることを、そして認識成果の評価を曇らせ偏らせることを、容認することと同一ではない。むしろ、逆に、ヴェーバーによれば、科学研究に携わる者は、自らの人間的弱さを認めるがゆえにこそ、研究が、そして研究成果の評価が、自らの世界観によって曇らされることのないよう細心の注意を払わなければならない。さらに、かれは、自らの世界観による曇りを見出しこれを拭う努力をしなければならない。

ましてや、ヴェーバーが研究者の上記のような弱さを認めることは、積極的に何らかの倫理的科学を形成すること、例えば一つの『倫理的』科学としての国民経済学を形成することを、かれが容認することを意味するものでは断じてない。

このことについて、ヴェーバーは、いう。

「だが、このように（われわれ自らが――笠原）人間的弱さをもつことを告白することは、（われわれが――笠原）一つの『倫理的』科学（eine »ethische« Wissenschaft）としての国民経済学、すなわち、諸々の理想をその要素としこれにもとづくことによって、または諸々の一般的な倫理的命令（allgemeine ethische Imperative）をその要素に適用することによって、具体的諸規範を形成するべきだ、とする経

済学、を信奉することから遠く離れている。」  
(SS. 151～152.)

ここにヴェーバーのいう「一つの『倫理的』科学としての国民経済学」のうちの第二のものの行き方、すなわち、「諸々の一般的な倫理的命令をその要素に適用することによって、具体的諸規範を形成する」行き方として、われわれは、一つには、例えば、絶対的・超越的な基本規範から、さまざまな具体的行動における諸々の特殊規範を演繹的、体系的に導き出そうとする決疑論（Kasuistik）としての倫理的経済学の行き方を想起することができるであろう。<sup>1)</sup>そして、われわれは、ここにヴェーバーのいう第一のものの行き方、すなわち、「諸々の理想をその要素としこれにもとづくことによって、…具体的諸規範を形成する」行き方を、かれがすでに述べていた「経験的基礎をもつ倫理的科学」の行き方のうちに見ることができる。

### (3) 世界観と個人の尊厳

以上のように、ヴェーバーによれば、個人の世界観が科学研究と議論そしてその評価を曇らせる可能性ないし危険性は、科学研究に携わる如何なるひとにも、かれが人間である限り、存在する。科学者がもつ世界観は、かれが誰であろうと、かれの科学研究、議論、評価を害する危険性を常にもつのである。

だが、われわれが考えるところでは、科学者が自ら理想をもち価値をもつこと、これ自体は、かれの科学研究に反することをも、これを害することをも意味しない。むしろ、われわれは、逆に、科学者が自らの理想と価値とをより強力に有することによってこそ、かえって、この理想ないし価値にもとづいてかれが設定する何らかの経験的事実の解明という課題が、より強力

に推し進められうる、と考えることさえできるであろう。なぜなら、われわれには、科学的研究これ自体も、人間の社会的行動の一つであり、それは、他の社会的行動と同じく、明確かつ強力な理想にもとづくとき、より強力になされうる、と思われるからである。

さらに、また、われわれは、ここで、ヴェーバーが、実践的行動をその至高の理念にまで遡って解明すること、そしてこのような理念を含む実践的行動を指示すること、この二つを区別しているのは、かれが、ここにいわゆる実践的行動そのものを、実践的行動の解明よりもその意義ないし価値において劣る、と考えているためではないことを、指摘しておかなければならない。

ヴェーバーによれば、ひとの実践的行動における諸価値そしてこの基礎にある諸理想、とりわけこのなかで最高かつ最終のものは、ひとの人格を構成する基本的要素であり、ひとの人格に尊厳を与え、ひとの人生に意味と意義とを与える。それは、ひとにとって、実に「客観的」な存在として感じられるほどのものでさえある。それゆえにこそ、ひとは、これを表明し、さまざまな逆境においてこのために戦い、これを発展させようとする。

だが、このような理想は、これが当の人間にとっては「客観的」な存在として感じられるほどのものであるにもかかわらず、それがまさに個性としてのかれの人格を構成するものであるがゆえに、ひとによって相違しうるのであり、そのうちのあるものは、多くのひとにとっては奇異に見えることさえある。

このことを、ヴェーバーは、次のようにいう。

「——さらに、また、『人格（*Persönlichkeit*）』のあの最も内面的な諸要素、われわれの行為を

規定し、われわれの人生に意味と意義とを与え、まさに最高かつ最終の諸々の価値判断が、われわれにとっては、『客観的』価値に満ちたもの（*etwas »objektiv« Wertvolles*）と感じられることも、たしかである。われわれは、この諸要素、この諸々の価値判断を、まさに、これがわれわれに妥当し、われわれの人生の至高の諸価値（＝諸理想ないし諸理念——笠原）から流れ出るものであるがゆえにのみ、主張することができるのであり、また、それゆえにこそ、人生の諸々の逆境に対する戦いにおいて、それを発展させることができるのである。そして、たしかに、『人格』の尊厳（*Würde*）なるものは、この人格にとって、かれに固有の人生に関わる諸価値が存在するところにのみある。——このことは、ときに、この諸価値が専ら特異な個性（*die eigene Individualität*）のうちにおいてのみ存在するように見えるような場合においても、そうである。この場合には、まさに、この人格が価値としての妥当性をもつと主張する類いのかれの好み（*Interessen*）に合う『奔放な生活（*Sichausleben*）』でさえ、この人格にとっては、自らの理念として妥当するのである。」（S. 152.）

たしかに、このような理念ないし理想あるいはこの発露としての「最高かつ最終の諸々の価値判断」は、上述のように、これを有するまたはこれをなすひとには、まさに、「客観的」妥当性をもつ存在であると感じられるほどのものでありうるのであるが、それがこのようなものであればあるほど、かれの理想は、かれにとってますます意味と意義とをもつことになり、かれは、それを外部に対してより強力に主張することになるであろう。

ただ、ここでわれわれが注意しなければなら

ないことは、ここにいう、あるひとの理想の「客観的」妥当性が、かれの信仰にもとづくものであること、ここにいう「客観性」が、いわば信仰的「客観性」であること、そして、これは、科学的「客観性」とはまったく異なるものであること、これである。そのような信仰的「客観性」の如何は、宗教あるいは形而上学のみが問うことのできるものなのであって、形而下学としての、経験的事実についての認識の客観性を求める科学、すなわち経験科学、が問うことのできるものでも、また問うべきものでもない。

そこで、ヴェーバーはいう。

「いずれにせよ、ひとが諸価値を信仰している場合にのみ、かれが自らの価値判断を外部の人びとに対して主張しようとする試みには意味がある。しかしながら、これら諸価値が妥当性をもつか否かを判断することは、信仰の問題であり、さらには、おそらく、まさに人間と世界の意味についての形而上学的な思弁的考察および解釈の課題、これのみなのであって、われわれがこの雑誌において育てるべきだと考えている意味での経験科学が扱うべき問題では決してない。」(S. 152.)

#### (4) 科学研究における価値の伏在

さて、このように、信仰および形而上学的思弁の問題と科学の問題とを区別するヴェーバーは、次のようにいう。

— このような区別にとって決定的に重要なのは、— しばしば信じられているところとは異なり、— 如何なる最終目標といえども歴史的に変化するものであり、(その妥当性について — 笠原) 激しい争いがなされるものであるという経験的に証明されうる事実ではない。

なぜなら、そもそも、われわれの知識 — 例えば精密自然科学または数学の知識 — の最も確実であるかに見える諸命題でさえ、それが文化の産物にすぎない点では、良心の研磨や洗練と同じなのであり、歴史的に変わりうるし、激しい論争的になるからである。(Vgl. S. 152.)

ヴェーバーによれば、当事者にとっては永遠かつ普遍的真理だと思われる如何なる最終目標ないし理想も、人間社会の文化の産物の一つであるにすぎず、したがって歴史的に変化する。われわれは、また、それが、ある特定の時代においても、国ないし地域によって、またはひとによって、異なる内容をもちうることに、さらにはまた、同一の人物についてさえ、その人生の過程において、内容を異にしうることに、注意しなければならない。そこで、このような理想については、ひとが、それぞれ、自らの理想の内容を真理だと信じていればいるほど、そこには、他人との間に、そして自らの内においてさえ、激しい争いが展開されうるのである。

しかも、ヴェーバーによれば、同様のことは、科学的知識についても存在する。科学研究は客観的真理を追求するのであるが、それにもかかわらず、その成果としての知識は、人びとの理想と同じく、文化の産物なのであり、歴史的に変化する。このことは、科学研究のなかで最も確実であるかに見える、精密自然科学または数学の諸命題についてさえいわれうる。これら諸命題も、やはり文化の産物であり、歴史的に変化する。それにもかかわらず、ある科学的知識があるひとによって絶対的真理として信じられることとなるとき、これについては、やはり、激しい議論が展開されうるのである。

ここで、われわれは、ヴェーバーが、科学的知識、そのなかでも最も確実であるかに見える



精密自然科学または数学の諸命題さえもが、文化の産物の一つであり、歴史的に変化する、と考えていることにとくに注意しておくべきであろう。このことについては、われわれは、新たに、これが、科学は客観的「真理」を求めるということとどのように関わるか、を問わなければならない。そして、このことは、科学的研究の進歩とは何か、という疑問とも関わるであろう。われわれは、科学的研究の進歩とは、真理を求める科学が真理を得ることができないために苦悶する過程に他ならないと見ることもできるのである。この場合、われわれは、「科学が真理を得ることができない」ということが、「科学的研究が進歩することができない」ということとは、まったく異なることに注意しておくかなければならない。

だが、いずれにせよ、このようなことは、われわれがここでとりあげようとする問題ではない。それは、ヴェーバーの論文の第二の問題に関わるものであり、われわれが、われわれのこの論文の第３章以下でとり扱おうとするものである。

さて、われわれがここで注意しておくかなければならないことは、科学的知識が文化の産物の一つであって、何らかの理想ないし価値にもとづいているということ、これである。

われわれは、第一に、人間が求めるべき理想として、しばしば、真・善・美の三つがあげられ、この三つがそれぞれ、科学、倫理、芸術によって追求されるべきものとされていることを知っている。このような考え方を、われわれは、ここでは、一応受け容れておくことにしよう。このとき、われわれが留意すべきことは、真ないし真理が、善および美とともに、人間の理想の一つ、至高の価値の一つとして追求される

ことが認められていること、これである。われわれは、このように真理を人間の至高の価値ないし理想の一つとし、これを科学によって追求することを認めること、このこと自体が、人間の理想観ないし価値観を表す文化の産物であり、歴史的に変化しえ、また変化するものであることに留意しなければならない。

それだけではない。われわれは、第二に、真理の追究をその課題とする科学においてとりあげられる問題を構成する基本的諸要因、すなわち考察の対象と観点そして考察の手続きないし方法が、やはり人間の文化の産物であり、そこには人間の価値がその基礎に存在することを看過してはならない。

だが、科学的研究が、したがって科学的知識が、このように理想ないし価値に関わること、というより、むしろ、それが理想ないし価値にもとづいていること、このことは、しばしば、科学的研究に携わる人びと自身によっても自覚されていない。かれらの多くは、自らの研究が何らかの理想ないし価値にもとづいていることに気づくことなく、自らは普遍性をもつ真理を探究しており、自らの研究成果としての知識はこのような真理だと、しばしば無条件に信じているのである。ここでは、理想ないし価値は、その問題性が明確に意識されることなく存在している。それらは、暗黙のうちに、いわば自明のものとして、かれの研究のうちに伏在している。だが、われわれが注意しなければならないことは、ここに伏在している理想ないし価値が、決して自明のものではなく、議論の対象となりうるものであること、これである。

ヴェーバーがここで具体的にとりあげる価値についての問いは、以上のうち、第二のものに関わる。この問いについて、かれは、科学的研

究における価値の伏在を、とりわけ、経済政策ないし社会政策について述べる。

かれはいう。

「ところが、われわれが、特に、(通常の意味での) 経済 - および社会政策の実践的諸問題について思いを巡らせさえすれば、そこには、たしかに、数多くの、まさに数えきれないとさえいわれうるほどの実践的個別諸疑問 (Einzelfragen)<sup>2)</sup>に関する議論をする際、人びとが、おしなべて、ある種の諸目的があたかも自明であることを前提としていることに、われわれは、気づくのである。——このような実践的個別諸疑問としては、例えば、緊急時貸し付け (Notstandskredite) を、公衆衛生、生活保護のための具体的諸課題を、工場監督、労働裁判、職業紹介、労働保護立法の大半、といった諸措置を、考えて見ればよい。——このように、上記のような実践的個別諸疑問においては、少なくとも一見したところでは、(自明の——笠原) 諸目標 (Ziele) を達成するための単なる諸手段、これのみが問題とされているように見えるのである。」(SS. 152~153.)

すなわち、社会政策に関していえば、何らかの政策的理念にもとづく日常の業務においては、個別的諸問題の処理に際して、何らかの目的ないし目標が自明のものとして与えられていることを前提として、日々の業務が展開されている。ここでは、あたかも、与えられた目的を達成するための手段の選択のみが問題であるかのように見えるのである。このことを、われわれは、たしかに、例えば、個々の市民に直接に対応する下級行政組織の日常業務にしばしば見ることができであろう。

ところが、この場合においても、この日常業務の前提とされている政策それ自体にまで目線

を上げるとき、われわれは、そこに、諸々の価値および理念の対立が存在することに気づかざるをえないこととなる。

そこで、ヴェーバーはいう。

「だが、ここで、われわれが仮に——このようなことをすれば科学は必ずや罰を受けざるをえないこととなるであろうが——自明であるかに見えるものごとを真理だと考え、これを実践において実現しようとする場合に直ちに生じることとなる葛藤を、目的合理性という純技術的問題だとみなそうとする——これは、実に、しばしば誤っているといわれざるをえない——場合でさえ、慈善的・警察的な福祉 - および経済介護 (karitativ-polizeiliche Wohlfahrts- und Wirtschaftspflege) (といういわば下層ないし現場の日常業務——笠原) の諸問題から経済 - および社会政策 (Wirtschafts- und Sozialpolitik) (といういわば上層——笠原) の諸疑問へと目線を上げるとき、われわれは、われわれを規制している諸々の価値基準 (regulative Wertmaßstäbe) が自明であるかに見えるという、まさにこのことが、たちまちのうちに消え去ることに気づかざるをえないであろう。」(S. 153.)

このようにして、ヴェーバーは、次のように結論する。

「ある問題の社会政策的性格を特徴づけるものは、まさに次のことである。すなわち、定められている諸目的からの単なる技術的考量 (= 手段のみの考察——笠原) にもとづくだけで、ものごとをすませることはできないこと、われわれを規制している諸々の価値基準自体が争われうるものであり、また争われざるをえないものであること、これである。というのも、社会政策的問題は、諸々の一般的な文化についての疑問の領域に位置するものだからである。」(S.

153.)

この場合、社会政策的問題における諸々の価値基準ないし理念に関する争いについて、ヴェーバーは、当時の階級闘争に関わる議論の隆盛を考慮して、また、次のようにいう。

「そして、人びとがしばしば信じたがるところとは異なり、争いは、『諸々の階級利害』の間のみ存在するのではなく、諸々の世界観の間にも存在する。—— この場合、当然ながら、われわれは、次のことを否定しているわけでは決してない。すなわち、個々人が如何なるものを自らの世界観として選択するかを決定するに際しては、他の多くの要因とともに、かれの『階級利害』—— われわれは、ここでは、見せかけにおいてのみ一義的なこの概念をひとまず受け容れておく—— に結びつく親和性の程度が、通常、たしかに、著しく重要であること、これである。」(S. 153.)

それは、ともかく、ヴェーバーは、かれの上記の論述から、概略的に、次のように結論する。すなわち、経済政策ないし社会政策に関する科学的考察においては、理想ないし価値は、そこに取り扱われる問題がより一般的になるほど、顕わになる、と。

かれはいう。

「いかなる情况においても確かなのは、次の一つのことである。すなわち、取り扱われる問題が『より一般的に』なればなるほど、したがって、この場合、その問題の文化意義がより広範囲に及べば及ぶほど、それだけ、経験的知識の素材から一義的な解答を得ことは困難になり、それだけ、信仰および諸々の価値理念という、最終的で至高の個人的な諸公理が入り込んでくること、これである。」(S. 153.)

われわれは、以上にヴェーバーが説くことを、

次のように理解することができるであろう。

—— 研究の対象としての社会政策的問題が、実践において、ときに、自明の目的に対する手段の合理性如何の問題、この意味での純技術的問題、として扱われていること、このことは、ここに扱われている実践的問題が個別的であればあるほど、そうであること、だが、ここに自明のものとして前提とされている目的は決して自明ではないこと、それは理念ないし価値にもとづくものであり、これは争われえ、また争われざるをえないものであること、このようにして、ここには、理念ないし価値の問題が伏在していること、研究者がこのことを理解せず、ここに前提とされている目的を明確にとりあげることなく、これを前提として、当の社会政策的問題を、単なる目的合理性の問題だと解し合理的手段を提示することになれば、かれは、このことによって、意識的または無意識的に、なんらかの理念ないし価値を真理として前提し、この理念ないし価値に加担することになること、しかしながら、かれが科学者として認識の「客観性」を重視する限り、かれは、実践的問題のうちに伏在している理念ないし価値、これにもとづく目的を、前提とするのではなく逆に、これらを明確にとりあげて問題としなければならぬこと、これである。

#### (5) 理想からの演繹体系としての科学の誤謬

さて、あらゆる科学研究が理想ないし価値にもとづくものであるとき、この理想を実現するための価値ないし規範の体系を形成しようと意図し、しかもこのことこそが科学の課題だとする考え方が生じてくるのは、避けられえないことであろう。このような考え方においては、例えば、善と真とが区別されず、善なるものと

しての理想は、そのままに真なるものとされる。そして、至高の理想としての最高価値ないし基本価値という真理から下位の諸価値をいわば演繹することによって、真なるものの体系としての当為ないし規範の体系の形成と、この実現とが、意図されることになるのである。これは、決疑論に習う科学観ともいわれうるものであり、われわれが、F. シェーンブルーク (Fritz Schönpflug) によって見事に描写された「規範科学」(Normwissenschaft)<sup>3)</sup>に、その典型的な例を見る行き方に他ならない。

このような行き方について、ヴェーバーは、次のようにいう。

「ときには専門家でさえもが、とりわけ実践的社会科学については、『一つの原理』を設定し、この科学的妥当性を裏づけ、次に、この原理から実践的個別諸問題を解決するための諸規範を一義的に導き出すことができる、という考え方が妥当であると、いままなお信じていることを、われわれは知っている。だが、このような事態は、あまりにも素朴であるといわれざるをえない。」(S. 153.)

人びとが実践において示す諸価値の内容を、これらがもとづいている諸理想にまで遡って明らかにすること、このことは、すでに、ヴェーバーが技術的批判の一つとして認めていたことである。だが、このことは、一般的に妥当する理想としての最高価値にもとづく諸価値の演繹体系の形成を、そのなかでも、とりわけ、一般的に妥当する最高価値の設定を、科学の課題としてかれが認めることを意味しない。かれによれば、そのようなことは科学の課題ではないし、また、そもそも、そのような企ては、実践的にも不可能である。

そこで、ヴェーバーはいう。

「実践的諸問題を『原理的に』論究することが、すなわち無反省のままに執拗に現れてくる諸々の価値判断をこの理念内容へと還元することが、社会科学において如何に必要であろうとも、そして、とりわけ、われわれの雑誌が、まさにこのようなことをなそうと如何に意図してしようとも、——われわれの諸問題のための一つの実践的公分母を、一般的妥当性をもつ最終的諸理想の形で形成することは、われわれの雑誌の課題では決してないし、また、そもそも如何なる経験科学の課題でもない。それは、それ自体、実践的にも決して解決できないだけでなく、それ自体が不合理である、といわれざるをえないであろう。」(SS. 153～154.)

「そして、われわれを拘束する諸々の倫理的命令が、どのような根拠にもとづき、またどのような種類のものであると解釈されようとも、この諸々の倫理的命令から、当為としての諸々の文化内容を一義的に導き出すことが可能でないことは、諸々の規範から、個々人を具体的に拘束する諸々の行為を導き出すことが可能でないことと同じく、確かなことである。しかも、このような可能性は、ここで問題となる文化の内容が広範であればあるほど、確実に少なくなるのである。」(S. 154.)

以上の引用文においてヴェーバーがとりわけ念頭においていることが、一般的に妥当する価値を確定することが可能でないこと、このことであることは、明らかであろう。

もっとも、理想や価値の相違や対立は、何らかの特定の人びとの間あるいは特定のひとの内面においては、少ないことがある。このような人びとあるいはひととは、例えば、強力な拘束力によって結合された特定の宗教的団体そして強固な意志をもつ特定の個人である。これらの



人びとそしてひとの内部においては、理想や価値の対立や揺らぎが少なく、そこには一種の威厳が伴いさえするのである。

そこで、ヴェーバーはいう。

「諸々の実証主義的宗教(positive Religionen) — より正確に表現すれば、教条による拘束の強い諸々の小教団 (dogmatische gebundene S e k t e n)<sup>4)</sup> — だけが、諸々の文化価値の内容に、絶対的に妥当する倫理的命令という威厳を与えることができる。この他には、個々人が実現しようと意欲する諸々の文化理想、そしてかれが実現するべきものと考える諸々の倫理的義務が、原理的に多様な威厳を有する。」(S. 154.)

しかしながら、このことが、これらの人びとあるいはひとの理想ないし価値が一般的妥当性をもつこと、ましてや、科学的妥当性をもつこと、を意味するわけでないことは、いうまでもない。

#### (6) 折衷主義の誤謬

いずれにせよ、ヴェーバーによれば、科学の課題は事実を確認することにあるのであって、事実の意味を与えて理想ないし価値を作り出すことにはない。各人が如何なるものを自らの理想ないし価値とするべきかという問いに対する答えは、事実のうちに与えられているわけではなく、したがって、事実から読み取られうるものではない。各人の理想ないし価値は、各人が自らの責任において作り出さなければならない。それゆえにこそ、それは、各人にとって絶対的な存在であり、侵されるべからざるものでありうる。

そこでヴェーバーはいう。

「認識の木の實を口にした文化の時代に生き

るわれわれの運命は、次のことを知らなければならぬことにある。すなわち、われわれが世界の出来事を如何に完全に研究し尽くそうとも、この研究の結果から、われわれがこの出来事の意味を読み取ることができるわけではなく、われわれ自身がこの意味を作り出す者であらざるをえないこと、経験的知識が如何に発展しようとも、これからは『諸々の世界観』が作られうるわけではないこと、したがって、われわれを強烈に動かす至高の諸理想が、常に、他の人びとの諸理想との闘争においてのみ作用し、しかも他の人びとのこの諸理想は、われわれの諸理想がわれわれにとって侵すべからざるものであるのと同様に、他の人びとにとって侵すべからざるものであること、これである。」(S. 154.)

ところが、理想ないし価値のこのような厳しさ、すなわち理想ないし価値がひとによって異なりうるものであり、しかもそれがそれぞれのひとにとって絶対的存在でありうることを、理解せず、さまざまな理想ないし価値の折衷によって、一つの客観的な理想ないし価値を得ることができる、とする考え方がある。ヴェーバーが次に述べる折衷主義 (Synkretismus) が、これである。

ヴェーバーは、上記引用文に続けていう。

「この事態がもつ強力な厳しさを理論的にごまかし、この事態がもたらす帰結を実践的に回避するものこそは、発展史的相対主義 (der entwicklungsgeschichtliche Relativismus) の産物として時折現れる楽観的折衷主義、これである。ここに生じうるものは、その時々、特定の政治家たちに忠誠を尽くして、当面の意見の対立を仲裁したり、または、かれらのうちの一人の味方をして、同じことをしたりするような、明らかに主観的な事態である。」(S. 154.)



このように、折衷主義によって形成される理想ないし価値は、明らかに、すべての人びとに妥当するものではない。それは、結局は、特定のひとあるいは人びとの理想ないし価値をより多く考慮するものにならざるをえない。いわゆる右派の理想と左派の理想との中間を意味する中道なるものも、また、すべての人びとに妥当するものではない。これらは、いずれも科学的「客観性」とは、まったく関係がない。しかも、これらは「客観性」を装うのであり、このことによって、事態を覆い隠す作用をもつ。このようにして、それらは、科学に多大の害を与えるのである。

このことについて、ヴェーバーは、次のようにいう。

「だが、このような事態は、科学的『客観性』とは、少しも関係を有しない。『中道』なるものが、右派または左派の極端な党派的理想より少しでも科学的真理に近いなどということは決してない。不快な事実と人生の諸々の実在とをこれらの苛酷さのままに見ようとしないこと以上に、科学の利害に長い間にわたって害をなすものはない。」(SS. 154~155.)

このようにして、ヴェーバーはいう。

「この雑誌は、多くのものの総合 (Synthese) によってまたは多くの党派的諸見解を織り混ぜることによって科学的妥当性をもつ実践的諸規範が得られるとする重大な自己欺瞞と断じて闘うであろう。なぜなら、このような自己欺瞞こそは、自らの諸々の価値基準を相対主義によって覆い隠そうとするものであるがゆえに、自らの諸教条 (Dogmen) の科学的『証明可能性 (Beweisbarkeit)』を主張する諸々の党派の旧く素朴な信仰よりも、はるかに、研究の公正 (Unbefangenheit) にとって危険だからである。」

(S. 155.)

われわれは、ここにいわゆる研究の公正ないし科学的公正が、ヴェーバーによって、のち(本論文では7以下)にとりあげられるものであることに注意しておかなければならない。

## (7) 価値判断と科学的認識

### —— 科学者の責任 ——

すでに明らかなように、科学的認識と価値判断とを区別するヴェーバーは、価値判断の意味と意義とを否定するわけでは決してない。自らが科学的認識に努めるのみならず、これと並んで、自らの責任において価値判断をなしこの擁護に努めること、この二つをともに自らの課題として果たすこと、これが、科学者であるとともに一人の人間であるヴェーバーの意図するところである。

かれはいう。

「認識することと判断すること (Beurteilen) とを区別できること、そして事実の真理を見ようとする科学的義務とともに、自らの諸理想を擁護しようとする実践的義務を果たそうとすること、これこそは、われわれが一層身につけたいと思うことである。」(S. 155.)

ここに「判断すること」が、批判的判断ないし科学的判断をなすことではなく「価値判断をなすこと」を意味することは、われわれがここでいうまでもない。

ところで、この引用文に述べられている課題を果たそうとするとき、まず重要なことは、一方における感情ないし情緒の、そして良心の問題と、他方における経験的事実の認識の問題とが異なることを自覚することである。

それゆえに、ヴェーバーはいう。

「われわれにとって重要なことは、次のこと

である。——如何なる時代であれ、ある議論が、われわれの感情に、そして具体的な実践的諸目標または諸々の文化形態および文化内容に感激するわれわれの能力に、頼っているのか、あるいは、そもそも倫理的諸規範が問題となる場合に、われわれの良心に頼っているのか、それとも、結局、経験的真理（Erfahrungswahrheit）の妥当性を要求するようなやり方で、経験的现实（empirische Wirklichkeit）を思惟的に整序するわれわれの能力と欲求とに頼っているのか、これらの間には調停することのできない相違が存在しており、存在し続けること、これである。」（S. 155.）

われわれは、ヴェーバーのこの論述を、概ね、一方における美的能力と倫理的能力、そして他方における認識能力、この二つを大別するものとして理解することができるであろう。この場合、美的能力と倫理的能力とは、いずれも価値判断に関わり、認識能力は、事実判断ないし事実の確認に関わる。すなわち、ヴェーバーは、ここでは、感受性という情緒的能力ないし美的能力そして良心という倫理的的能力にもとづく理想ないし価値の判断と、知性という認識能力ないし科学的能力にもとづく経験的事実の解明との間には、明確な相違があることを主張しているのである。

このことは、経験的事実の解明ないし思惟的整序が、もともと何らかの問題意識に、したがって価値ないし理想に、もとづいてなされていることを知り、また、とりわけ文化諸科学においては、その問題意識が、しばしば、実践的利害の場において最高の価値とされているもの、そして当の研究者自身にとってもそう思われるもの、にもとづいていることを知っている場合においても、そうである。

そこで、ヴェーバーはいう。

「しかも、この命題は、実践的利害のあの最高の『諸価値』が、諸々の文化科学の領域において、思惟を整序する活動がそれぞれにとる方向に対して決定的意義をもち、またもち続けることが明らかにされる場合においてさえ、正しいままである。」（S. 155.）

なぜなら、このように思惟的整序の方向ないし問題意識にとって決定的な意義をもつ至高の価値といえども、やはり恒久性と普遍性とを有するものではなく、したがって、この価値にもとづく問題意識も、結局は時代によって、そして社会やひとによって異なりうるのであるが、しかし、問題意識がたとえこのように異なるとしても、これにもとづいてなされる科学研究としての事実の思惟的整序、すなわち、何らかの仮説の具体的立証の方法と結果との、さらには何らかの価値の論理的分析とこの価値の追求がもたらしうる帰結との、解明、これ自体は、あらゆるひとが、したがって当該研究の前提としての価値を有しないひとでも、正しいものとして認めうるようになされなければならないからである。

そこで、ヴェーバーはいう。

「というのも、諸々の社会科学の領域における方法的に正確な科学的証明（wissenschaftliche Beweisführung）は、これが、（科学的客観性という——笠原）その目的を達成しようとしてなされるものである限り、中国人によっても正しいと認められなければならないこと、または、——より正しくいえば——、この証明においては、その目的が資料不足のためにおそらく完全には達成されえないとしても、それにもかかわらず、この目標（＝目的——笠原）が追求されなければならないこと、さらに、また、

ある理想を、この内容について、しかもこの最終的諸公理にまで遡って論理的に分析し、そして、この理想の追求から、この追求が成功したと仮定するとき、論理的かつ実践的にどのような諸帰結が生じるかを示すこと、このことが中国人にも妥当するものでなければならないこと、——しかるに、中国人が、われわれの倫理的諸命令に対して、『聴く耳』をもたないことがありうること、中国人が、われわれの理想自体を、そしてこれから生じる具体的な諸々の価値判断を、斥けることができるし、また、たしかに、しばしば、斥けるであろうこと、しかも、このことによって、あの思惟的分析の科学的価値をいささかも傷つけるわけではないこと、これらは正しいし、将来においても正しいままであるからである。」(SS. 155～156.)

ところで、ひとは、これまで、自らが携わる文化生活の意味を一義的に決定しようとする試みを絶えず繰り返してきた。このような試みは、ひとが自らの生の意味を考え、自らの生をより良く生きようと意欲する限り、なされうるものである、というよりむしろ、なされざるをえないものである。そして、このような試み、これこそは、文化生活の最も重要な要素であって、文化生活を強力に推進させる力の一つともなってきたのである。したがって、文化生活を研究対象とする学問としての諸々の文化科学、したがってこの一つとしての経済学は、このような試みを、研究対象としての文化生活の重要な一部として扱うことになる。

この意味で、ヴェーバーはいう。

「われわれの雑誌が、文化生活の意味を一義的に決定しようとして絶えず不可避免的に繰り返されている試みを無視するようなことは、決してないであろう。逆に、われわれは、このよう

な試みが、それ自体、まさにこの文化生活の最も重要な産物の一つであり、さらにまた、事情によっては、文化生活を最も強力に推し進める力の一つであるがゆえに、この意味において『社会哲学的』なこの議論の経過を常に注意深く迎えることになるであろう。」(S. 156.)

このような「社会哲学的」な議論の研究は、この議論を解明するために、この議論の内容を辿って、そこでは世界がどのように形而上学的に解釈されているか、またはされていると推測されるか、にまで立ち至らざるをえない。それだけではない。そもそも研究なるものが何らかの問題意識にもとづき、したがって価値にもとづくものであらざるをえない以上、「社会哲学的」な議論の研究をなす者は、上記の形而上学的解釈との関連で、また、ときにはそれ自体として、自らの価値ないし理念の形而上学的考察にさえ、立ち入らざるをえないことがあるであろう。

もっとも、この場合、このような研究が経験科学的研究に関してなされるものである限り、それは、いうまでもなく、常に、経験的事実の思惟的整序における客観性の追求のためになされなければならない。

そこで、ヴェーバーはいう。

「さらに付け加えれば、この場合、われわれは、次のような偏見とも、まったく無縁である。すなわち、文化生活の考察に際して、経験的に与えられているものごとの思惟的整序を超えて、世界を形而上学的に解釈しようとすることは、すでにこの性格ゆえに、認識に奉仕するという課題を満たすことが決してできないであろう、とする偏見が、これである。もっとも、(認識に奉仕するという——笠原) この課題がそもそも如何にして満たされるかは、もちろん、まず

は認識論の問題なのであり、この問題に答えることは、われわれのここでの目的からすれば、われわれが控えざるをえないことであり、また控えうることでもある。というのも、われわれの仕事にとっては、一つのことが明確だからである。すなわち、われわれの意味における社会・科学的雑誌は、これが科学を促進するものである限り、——上例に沿っていえば——中国人に対しても経験的現実の思惟的整序の妥当性を要求する真理を追究する場であるべきだということ、これである。」（S. 156.）

## 7 科学研究における価値の明示

### （1）科学研究と価値の明示

科学的認識に携わる研究者も、一人の人間として、自らの理想を有し、これを状況に応じて価値判断のうちに表現する。このことは、かれがその実践において人生に対して真剣に向き合おうとする者であればあるほど、そうである。そして、かれは、自らの理想を表現し擁護する権利を有する。

それだけではない。この理想は、他方で、かれの科学者としての研究の問題意識の基礎を形成する。かれのこの問題意識は、かれの理想の表れとしての価値の一つ、に他ならない。かれの研究は、すでにこの出発点においてかれの価値を前提とし、そして、かれがその研究を首尾一貫させようとする限り、この価値によって導かれざるをえない。かれは、研究の素材を、かれの価値との関わりにおいて選択し、この価値との関わりにおいて考察しなければならない。<sup>5)</sup>

このように、研究が価値を前提とし、これによって導かれざるをえないとき、研究者としてのかれに要請されることは、自らの価値がどの

ような理想にもとづくかを自ら解明するよう努めること、そして、かれがこのような理想ないし価値を前提としてその研究を進めていることを、自ら意識するだけでなく、読者にも明確に示し知らせることであろう。しかも、われわれの理解によれば、かれの価値の解明は、かれの研究の全過程においてなされざるをえないのであり、このようにして、かれの価値を自ら意識し、これを読者に示し知らせることは、かれの研究の全過程においてなされなければならないのである。<sup>6)</sup>

このことについて、ヴェーバーはいう。

「もちろん、編集者の一人であるわたくし自身もわたくしの共同編集者たちも、われわれの心を満たしている諸々の理想を価値判断のうちに表現することを禁じることができない。ただし、このように理想を価値判断のうちに表現する場合には、二つの義務が生じる。その第一は、あまりにもしばしば見られるように、多種多様な諸価値を不明確なままに混合し、諸々の理想の間の葛藤をごまかして、『すべてのひとにくばくかのものを与え』ようとするのではなく、現実を測定し価値判断を導き出すもとなっていて諸尺度が如何なるものであるかを、読者にそして自らに、常に明確に意識させること、これである。」（S. 156.）

このように自らの価値判断の基準となっている諸理想ないし諸々の価値尺度を、自らに、そして読者に明示すること、これが、ヴェーバーにおいては、科学者が諸々の理想を価値判断のうちに表現する場合、すなわち、諸々の理想にもとづいて価値判断をなす場合の、科学的公正の第一の基本的命令である。

この命令、あるいはこの命令に従う義務は、研究の対象としての理想ないし価値の解明にお



いて有用でもある。

ヴェーバーは続けていう。

「この義務が厳しく果たされるならば、そのときには、実践的判断の立場の表明は、純粹に科学的な利害から見て、無害であるだけでなく、まさに直接的に有用であり、実に、なされなければならないことでさえある。というのも、立法者およびその他の人びとの実践的諸提案の科学的批判においては、立法者の諸動機、および批判の対象とされる著作者たちの諸理想を、その影響の及ぶ範囲において解明することとは、実に多くの場合、これらの基礎に置かれている諸々の価値尺度 (Wertmaßstäbe) を、他の人びとの諸々の価値尺度と、そして当然ながら最良であるのは、自らの諸々の価値尺度と、対比することによって明瞭に理解できる形にすること、このこと以外の何ものでもないからである。」(SS. 156 ~ 157.)

「他のひとの意欲に対する意味のある評価 (Wertung) のすべては、(われわれ研究者 — 笠原) 自らの『世界観』にもとづく批判、自らの理想にもとづいて他のひとの理想に立ち向かうこと、によってのみなされうる。したがって、いずれにせよ、ある実践的意欲の基礎となっている最終的な価値公理 (Wertaxiom) の確認と科学的分析とが必要とされるだけでなく、この価値公理と、他の人びとの諸々の価値公理との関連の解明が必要とされる場合には、(われわれ研究者にとっては、— 笠原) 自らの世界観、自らの理想を、関連する限りで呈示することによる、『実証的』批判が、まさに不可避となるのである。」(S. 157.)

以上にヴェーバーのいうことが、かれのいう「技術的批判」の一部としてなされうるものであること、そしてかれがここにいう「他のひと

の意欲に対する意味のある評価」、「批判」が、理想ないし価値の解明のためになされるものであることは、いうまでもないであろう。

## (2) 価値の明示における思惟と意欲

以上のように、科学研究において価値の明示がなされうること、というよりむしろ、それが必要でさえあること、を主張し、価値の明示を、諸々の理想にもとづいて価値判断をなす場合の「科学的公正の第一の基本的命令」として理解するヴェーバーは、さらに、その際科学者が考慮しなければならない義務ないし命令、「科学的公正の第二の基本的命令」、を明らかにする。それは、科学者が、自らの価値を明示するに際して、自らがどこまでを科学者として語り、どこから意欲する人間として語っているか、を自覚すること、そして、どこまでを読者の知性に訴え、どこからその感情ないし情緒、さらには良心ないし倫理に訴えているかを、自らにのみならず、読者にも明らかにすることである。

かれはいう。

「そこで、この雑誌の紙面においては、——とりわけ諸々の法律についての論述がなされる場合に——、社会科学——すなわち諸事実の思惟的整序——と並んで、社会政策——すなわち諸理想(そのもの——笠原)の叙述——もが、なされざるをえないであろう。しかし、われわれは、この種の(諸理想そのものについての——笠原) 諸々の議論が『科学』だというつもりはないのであり、したがってこの種の議論と科学とを混ぜこぜにしたり科学と取り違えたりすることのないよう、全力をあげて用心することになるであろう。この種の議論を科学と混ぜこぜにしたり科学と取り違えたりするとき、論述はもはや科学ではなくなるのであり、このこ



とから、次のような、科学的公正の第二の基本的命令が生じる。それは、すなわち、諸々の理想を取り扱う場合には、読者（そして——再びいえば——とりわけ自分自身）に対して、筆者が思惟する研究者であることを止め意欲する人間として語り始めるのはどこか、議論が理解（＝知性——笠原）に頼るのはどこであり、感情（および良心——笠原）に頼るのはどこであるか、を常に明らかにすること、これである。」（S. 157.）

ヴェーバーによれば、「事実についての科学的論究と価値判断的熟慮との絶えざる混同は、われわれの専門学科（＝経済学——笠原）の論述のうちにいまなお広く行き渡っており、しかもまた非常に有害な、諸特質のうちの一つなのである。」（S. 157.）

このように、事実についての科学的論究と価値判断的熟慮との混同を排し、両者の区別を要請するヴェーバーは、かれが編集する雑誌に関して、次のようにいう。

「この論文において、われわれは、この（事実についての科学的論究と価値判断的熟慮との——笠原）混同に反対しているのであって、自らの諸理想を弁護するといったことに反対しているのでは決してない。信念がないこと（*Gesinnungslosigkeit*）と科学的『客観性』とは如何なる内面的親和性をも有しない。——この雑誌は、少なくともその意図においては、特定の政治的または社会政策的党派に反対するための論述を展開する場であったことがないし、これからもこのような場となることはないであろう。それは、同様に、また、政治的または社会政策的諸理想に賛成のまたは反対の宣伝をなす場であったことがないし、これからもこのような場となることはないである

う。このような目的のためには、他の諸々の機関誌が存在しているのである。」（S. 157.）

ヴェーバーが編集する雑誌は、科学的客観性を重視する。それゆえに、ここでは、寄稿者が、自らのそして他人の理想や価値について語らざるをえないとしても、このことは、科学研究に必要であるがゆえに、またこの限りにおいてなされなければならないのであり、自らの理想や価値を宣伝したり、他人の理想や価値に反対したりするた<sup>め</sup>にな<sup>さ</sup>れてはならない。このような、諸理想ないし諸価値のいわば闘争の場は、他の機関誌に与えられているのである。

## 8 科学的議論に対する開放性と自由性

以上の論述を前提として、ヴェーバーは、いまや、かれがかれのこの論文の冒頭に述べていた「傾向」に関する疑問に答えようとする。このことに関して、かれは、まず、かれの雑誌が、どのようなものであることを意図してきているかを述べ、次に、この意図にもかかわらず、この雑誌が歴史的状況により、結果的にどのようなものとな<sup>っ</sup>てきており、またなるであろうか、を述べる。

### (1) 科学的議論に対する開放性と自由性

ヴェーバーは、かれが編集する雑誌の紙面が科学的議論の場として設けられていること、そして、それゆえに、このことを認める限りで、あらゆる理想ないし価値をもつ人びとに開放されていることを、次のように述べる。

「この雑誌の特質は、むしろ、はじめから、まさに次のところにあったし、また、われわれ編集者が編集の仕事をなす限り、これからもずっと、次のことに求められることになるであろう。すなわち、この雑誌に掲載される論文のなかに

は、政治的に鋭く対立する人びとのそれが共に含まれること、これである。この雑誌は、これまで、『社会主義者の』機関誌であったことはないし、また、将来において『ブルジョアの』機関誌になることもないであろう。この雑誌は、この共同執筆者から、科学的議論の土台のうえに立とうとするひとの誰をも排除しない。」(SS. 157~158.)

ただし、かれの雑誌は、科学的議論の場を提供するものであり、ここに科学とは、いうまでもなく経験科学を意味するから、そこに掲載される論文は、経験的事実の解明をなそうとし、このような内容をもつものでなければならない。それは、このような内容をもたない表面的な儀礼的挨拶をなすものであってはならず、また、自らの理想を一方的に宣伝し、または他の人びとの理想を非難するものであってはならない。かれの雑誌は、社交の場を提供しようとするものでも、また政治的な宣伝や闘争の場を提供しようとするものでもないからである。そして、この雑誌に寄稿する人びとは、経験的事実の解明に寄与するために、他の人びとの論文を自らが批判するだけでなく、自らの論文を他の人びとが批判することをも、受け容れなければならない。<sup>7)</sup> この意味での科学的議論の自由を認める覚悟を有する人びとによってのみ、経験的事実の解明は進展しうるし、また、この雑誌は、まさにこのための場を提供しようとするものだからである。

そこで、ヴェーバーはいう。

「この雑誌は、『挨拶』のための遊び場、答礼や再答礼のための遊び場であることができない。したがって、それは、その紙面において、考えられる限り最も鋭い即事的・科学的批判に曝されたからといって、誰をも保護しない。それは、

その共同執筆者 (= 寄稿者 — 笠原) をも、編集者をも保護しない。このことに耐えることができない者、または、自分自身の諸理想とは異なる諸理想のために仕事をする人びととは、たとえ科学的認識のためであっても、一緒に働きたくないという立場に立つ者は、この雑誌に近づくことがないであろう。」(S. 158.)

もっとも、ヴェーバーは、かれの以上のような意図が容易に実現されうるものだとは考えていない。その理由の一つは、とりわけ当時のドイツの状況においては、以上のようないわば開放性と自由性が受け容れられるためには、人びとのうちに、これを妨げる、政治的党派と結びついた強力な心理的制約があると思われるからである。

かれは、上記引用文に続いていう。

「ところで、ここに明らかなのは、—— われわれは、自らを欺こうと思わないので、以下のようにいうのだが——、この最後に述べた諸命題が、残念ながら、実践的には、現在のところ、一見してそう見えること以上のものを含んでいることである。まず第一に、すでにわれわれが示唆したことだが、政治的に対立する者たちが、中性的 (neutral) 土台 —— (同じ科学者の —— 笠原) 仲間としての、または (同じく科学的真理を追求するという —— 笠原) 理想をもつ者としての土台 —— のうえに、囚われることなく集う可能性には、残念ながら、経験の示すところでは、どこにおいても、そしてとりわけドイツの状況においては、かれらの心理の面での制約がある。この心理的制約は、党派的热狂によってもたらされる偏狭と政治的文化が未発達であることとの一つの兆候であり、それ自体無条件に克服されるべきもの」である。(S. 158.)

それだけではない。科学的議論のための開放

的で自由な場を提供しようとする意図が容易には実現されない理由には、さらに、次のような、より一般的な性質のものがある。それは、社会科学においては、何らかの問題の研究そのものが、通常、特定の実践的諸疑問から出発しており、したがって、実践的関心をもつ人びとの特定の実践的意欲と結びついていること、これである。このことは、ヴェーバーの時代のドイツにおいては、上に述べた心理的要因を、さらに強力なものとする。

かれは、上記引用文の最後の文章の後半（したがって一つの同一の文章の後半）において、次のようにいう。

「だが、われわれのような雑誌においては、このような要因（＝上記の心理的制約——笠原）は、次のような事情によって、さらに、著しく強力に作用する。この事情とは、社会科学の領域においては、経験が示すように、科学的諸問題を展開しようとする動因（Anstoß）が、通常、実践的諸疑問によって与えられ、そのため、人間集団（Personalunion）に何らかの科学的問題が存在していることを認めるというこの単純なことが、生活する人間の特定の方向をもったある意欲と密接に結びついていること、これである。」（S. 158.）

それにもかかわらず、すでに述べたように、ヴェーバーの編集する雑誌は、何らかの特定の利害を共有する人びとが集うための場でも、ましてや、これらの人びとがその利害を実現するための場でもない。それは、このような利害に関わる具体的問題について、（後にヴェーバーが述べる言葉をうければ、）いわば一般的な関心を有する人びとが、科学的議論のために集う場である。ここに一般的な関心とは、関心一般ともいわれるべきものであり、そのうちに、さ

まざまな関心を含む。それは、とりわけ、当の具体的問題が提起されることとなった特定の利害に賛同的な関心のみならず、反対的な関心をも含むことが注意されなければならない。

いずれにせよ、以上の考察から、科学的議論のための開放性と自由性、われわれは、これらこそが、ヴェーバーの意図におけるこの雑誌の性格である、と考えることができるであろう。この性格が「傾向」に対して中性的であるのはいうまでもない。

## （２）「性格」、そして「性格」の「傾向」への転化の危険性

ところで、ヴェーバーは、かれの雑誌が、すでに、かれが意図する上記の性格とは別個の性格をもってきていることを述べる。

ヴェーバーが編集する雑誌は、すでに述べたように、あらゆる政治的理想をもつ人びとに開かれている。しかし、ある特定の利害を宣伝したりこの実現を図ろうとしたりする人びとにとっては、かれらが集う場は、すでに他に存在していることから、ヴェーバーが編集する雑誌には、結果として、この特定の利害によってこれに対立する自らの理想ないし価値が害されと考え、しかも自らの利害を主張したりこれを実現したりする場を他に持たない人びとが、多く集まることとなるであろう。このことによって、ヴェーバーの雑誌は、結果的に、ある「性格」を持つことになるのである。

すでに明らかなように、このことは、ヴェーバーの雑誌が、この後者のような人びとが集う場を設けることを意図していることを決して意味しない。それは、また、かれの雑誌が、このような人びとの利害と対立しこれを害するような利害をもつ人びとを排除しようとする意図を

もつことを意味しているわけでも、まったくない。かれの雑誌は、あらゆる理想ないし価値を有しこれを表明する人びとが参加を許されている開放的な場であり、しかもこれらの人びとが自由に科学的議論をする場として設けられているのであって、すでに述べたように、われわれの理解では、まさにこのことこそが、この雑誌の意図された性格なのである。

ここにわれわれのいう性格は、すでに述べられた「傾向」、すなわち政治的「傾向」とはまったく異なる。この雑誌は、あらゆる政治的「傾向」をもつ人びとに対して開かれている自由な議論の場であり、それゆえに、「傾向」については、一般的ないし中性的なのである。

だが、それにもかかわらず、ヴェーバーの雑誌は、上記のように、特定の利害の宣伝や実現を図ろうとする人びとの行動によって自らの利害が危険に曝されると考え、しかも他に自らの利害を主張する場をもたない人びとが、結果的に多く集まることになることから、ここにわれわれがいう性格とは異なる意味での「性格」をもちうることになる。

以上のことについて、ヴェーバーは、次のようにいう。

「それゆえに、ある具体的問題に対する一般の関心 (allgemeines Interesse) に作用されて作られることとなっているような雑誌 (=ヴェーバーが編集しているような雑誌——笠原) の紙面には、共同執筆者として、通常、次のような人びとが集うことになるであろう。(この具体的問題がもたらす——笠原) 特定の具体的諸情況が、かれらにとっては、かれらが理想として信じている諸価値と対立し、この諸価値を危険に曝すと思われるがゆえに、この問題に個人的関心をもつ人びとが、これである。その結果、

これら共同執筆者たちは、親和性をもつ類似の諸理想を有する人びとの世界を形成することとなり、またこの世界を再生産することになるであろう。そして、このことは、このような雑誌に、少なくとも、これが実践的——社会政策的諸問題を取り扱う場合に、ある特定の『性格』(»C h a r a k t e r«) を与えることになるであろう。この性格は、生き生きとした感情をもつ人びとが共に仕事をする場合には常に不可避免的に随伴して現れるものであって、それは、これらの人びとのこれら諸問題に対する評価的な意見の表明が純理論的研究に際しても必ずしも完全に抑圧されるわけではなく、そして実践的な諸々の提案や施策の批判に際してもまた——上に詳論された諸前提のもとで——まったく正当になされる場合に現れるものである。」(SS. 158~159.)

ここにいう「性格」が、結果的に共同執筆者となる人びとのうちに存在する類似の諸理想および諸価値によって形成されるものであること、しかも、それが、中性的でなく、特定の「傾向」にも似たものであることは、いうまでもない。

ヴェーバーによれば、かれの雑誌のこのような「性格」は、かれが新たに編集者の一人となつてからのちに、一つの可能性として存在するだけではない。それは、かれの雑誌のそもそもの創刊以来、この雑誌に付きまとっていたものであった。

このことを、ヴェーバーは、以下のように説明する。

——ヴェーバーが新しく編集に携わることとなったこの雑誌は、その創刊以来、専ら科学的雑誌であろうとする態度を堅持してきたのであり、如何なる理想をもつ人びとをも受け入れようとしてきたのであるが、それにもかかわらず、



この雑誌は、この創刊の時期が、「労働者に関する疑問（Arbeiterfrage）」についての特定の政策的諸問題が社会科学における中心問題としてとりあげられていた時代であったため、この雑誌の執筆には、この問題が理想ないし価値に結びついていると考えた人びと、しかも、この理想ないし価値において類似の人びとが、結果的に、多く集まることとなった。

このような人びとが、「労働者に関する疑問」についての特定の政策的諸問題によって自らの理想ないし価値が危険に曝されたと考え、しかも、自らの理想を表明しこれを実現する場を他に有していなかった人びとであったことは、いうまでもないであろう。このような人びとが共同執筆者の多数を占めることとなったことによって、この雑誌は、実質的に、あたかも、特定の「傾向」にも似た「性格」を有することとなってしまったのである。

このことを、ヴェーバーは、次のようにいう。

「さて、この雑誌は、通例の意味での『労働者に関する疑問』についての特定の実践的諸問題が社会科学における論議の前面にあった時期に創刊された。まさにこのことから、ここに意欲的に取り上げられていた諸問題が最高かつ決定的な諸々の価値理念に結び付いていると考え、それゆえに、この雑誌の最も経常的な共同執筆者となった人びとは、同時に、あの諸々の価値理念によって、同じく、というよりむしろ類似して、染まった文化観を代表する人びとだったのである。そこで、この雑誌が『科学的』議論のみをなそうとすることを表明し『あらゆる政治的陣営』の参加を呼びかけることによって、何らかの『傾向』を追求する思惟を決然と斥けようとしても、それにもかかわらず、それが、上記の意味での『性格』を確かに有するもので

あることは、誰もが知っているのである。」（S. 159.）

ヴェーバーは、この「性格」の内容について、次のようにいう。

「この性格は、この雑誌に経常的に寄稿する共同執筆者たちによって形成されたものである。この共同執筆者たちは、通常、他の点ではさまざまに相違する見解を有しているにもかかわらず、労働者大衆の肉体的健全性の保護と、わが国の文化の物質的・精神的財産（Güter）への参加の増大の可能性の授与とを、目標と考え、——そして、物質的利害の領域への国家の介入を、現存する国家 - および法秩序の自由主義的なさらなる展開に結びつけること、このことを手段と考える点では、同じだったのである。また、かれらは、—— 遠い将来における社会秩序がどのように形成（Gestaltung）されるかについてのその見解が如何なるものであれ、—— 現在のところでは、資本主義の発展を肯定したのであるが、この肯定の理由は、資本主義の発展が、かれらにとって、社会構成（gesellschaftliche Gliederung）の古い諸形態よりも良いと思われることにあったのではなく、それが、かれらにとって、実践的に避けられないものであり、また、資本主義を根本からくつがえそうとする試みが、上記文化への労働者階級の参加を促進するのではなく阻害するように見えたことにあったのである。」（S. 159.）

ヴェーバーによれば、かれの雑誌がこのような「性格」を有してきたこと、また、有するであろうことは、ドイツの状況を考えるとき、避けられえないことであつたし、また、避けられえないであろうことである。そして、かれの雑誌は、このような「性格」をもってきたにもかかわらず、それがあらゆる理想ないし価値をも



つ人びとに開放され、これらの人びとの自由な科学的議論を認めてきていることによって、あらゆる陣営からの科学的議論への参加という成果の実現に実際に寄与してきているし、また寄与するであろうと思われるのであり、このことが、この雑誌が存続するための資格の一つであるともいわれうるのである。

このことを、ヴェーバーは、次のようにいう。

「ドイツに今日なお存在している情況——これについては、より詳細に述べる必要はないであろう——からすれば、以上のこと（＝かれの雑誌が上記のような「性格」を有してきたこと——笠原）は、避けられえないことであつたし、また今日においても避けられえないことであろう。だが、（そこには、——笠原）たしかに、直接的に、科学的議論へのあらゆる陣営からの参加という成果の達成への寄与が実際にあつたし、そして、また、（このことは、——笠原）かつては、この雑誌の強さの一因であつたし、——現今の情況では——まさに、おそらく、この雑誌が存続するための資格を示すものの一つとさえなっているのである。」(SS. 159～160.)

しかしながら、ヴェーバーによれば、この雑誌が結果として上記のような人びとをその経常的な共同執筆者としてきたこと、このことによって形成されるこの雑誌の「性格」は、場合によっては、この雑誌が意図する科学的公正を失わせ、この「性格」を「傾向」へと転化させる危険をもつ。

ヴェーバーはいう。

「もっとも、科学的雑誌においてこの意味での『性格』を発展させることは、科学研究の公正に対する危険を意味しうるし、共同執筆者の選択が計画的、一面的になされるようなことになる場合には、実際にこの公正を危険におと

しいれることにならざるをえないであろう。この後者の場合には、上記『性格』の育成は、實際上、『傾向』の存在と同じことになる。われわれ編集者は、自らにこのような事態をもたらす責任があることを、強く自覚している。われわれ編集者は、この雑誌の性格を計画的に変えようとは思っていないし、また、例えば、寄稿者を特定の党派の見解をもつ学者に故意に限定することによって、この雑誌の性格を作為的に保守化しようとも思っていない。編集者は、この雑誌の性格を与えられたものとして率直に受け取り、そのさらなる『発展』を見守る。この雑誌の性格が将来どのように形成されることになるのか、そして、おそらくは、われわれのこの雑誌への寄稿者たちが不可避免的に拡大するにつれて、どのように形成され直すのかは、第一に、科学研究に奉仕しようとする意図をもって寄稿者のなかに加わり、この雑誌の紙面に馴染むことになり馴染み続ける人びとの特性によって決まることになるであろう。そして、それは、さらに、この雑誌が促進したいと考えている、諸問題の拡大によっても作用されることになるであろう。」(S. 160.)

さて、以上のように述べてきたヴェーバーは、ここで、かれの雑誌が扱ってきたおり、またこれから扱うこととなるここにいわゆる「諸問題」との関連において、そもそも、かれが携わる専門学科としての経済学が、文化諸科学のなかでの他の専門学科と、どのように区別されるのか、という疑問に向き合うことになる。

思うに、かれの雑誌は経済学の雑誌であり、したがって、経済学的諸問題のみをとりあげるのであるが、このことは、かれのいう経済学的諸問題が、他の専門学科の諸問題からどのよう

に区別されるかが明らかにされない限り、科学的公正に反する結果をもたらさうからである。

そして、かれによれば、この疑問に答えるためには、かれは、かれ自らが、かれのこの論文の第二の問題としてあげていた科学研究の客観性の問題に向き合わざるをえないこととなるのである。

かれはいう。

「以上のように述べ来たったわれわれは、これまで論じてこなかった、われわれの研究領域の事実上の境界という疑問に到達することになる。しかし、この疑問については、ここでもまた、社会科学的認識の目標の性質についての疑問そのものを展開することなしには、答えることができない。われわれは、これまで、『価値判断』と『経験的認識（Erfahrungswissen）』とを原理的に区別するに際して、ある無条件に妥当する認識、すなわち経験的現実の思惟的整序、のやり方が、社会科学の領域においても存在するかのような前提を置いてきた。われわれは、いまや、この仮定を問題としてとりあげ、われわれが追求する真理の客観的『妥当性』とは、われわれの領域では何を意味するか、を論じなければならない。」（S. 160.）

「この問題が存在すること自体、そしてこの問題がここで当然に浮上してくることには、方法、『基本諸概念』および諸前提をめぐる争いを、（そして——笠原）『諸観点』の絶え間ない変遷とそこに用いられる諸概念の絶えることのない新しい規定を観察し、また、ヴィーンのある受験生が、あるとき『二つの国民経済学だ』と嘆いたように、理論的考察の形態と歴史的考察の形態とが、いまもなお一見して越えることのできない溝によって隔てられていることを観察するひとは、反対することができない。客観

性とは何か。まさにこの疑問を、われわれは、以下、詳論したいと思う。」（SS. 160～161.）

## 註

1) このような考え方については、われわれは、個別経済学（Einzelwirtschaftslehre）または経営経済学（Betriebswirtschaftslehre）に関するF. シェーンブルークの次の著作に、その明快な説明を見ることができる。

Fritz Schönplugg, *Betriebswirtschaftslehre, Methoden und Hauptströmungen*, Zweite, erweiterte Auflage von „Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre“, Herausgegeben von Hans Seischab, C. E. Poeschel Verlag, 1933/1954.

2) この場合には、Frage という語は、これまでの用い方とは異なり、Problem という語と同じ意味で用いられているように見える。Einzel という語が付せられているがゆえであろう。

3) このことについては、われわれがすでに注記したことに、さらに加えて、次を参照のこと。

笠原俊彦稿「規範科学の一理想型——価値判断と客観性——」『香川大学経済論叢』第59巻第2号、昭和61年9月

4) ここにいう「実証主義的宗教」および「小教団」については、次を参照のこと。

笠原俊彦著『企業の営利と倫理——M. ヴェーバー研究——』税務経理協会、平成15年、第部第1章

5) このことこそは、ドイツ経営経済学の形成期において、対象と選択原理の問題として論

じられたものに他ならない。

- 6) このことについては、例えば次を参照のこと。

笠原俊彦稿「社会科学における偏見の実在  
判断の形成と価値判断の処理 — ミュルダールの所論を中心として — 」『香川大学経済  
論叢』第58巻第1号、昭和60年6月

- 7) ここにいう「批判」が「非難」とまったく異なるものであることは明らかであろう。後者が価値判断であり、前者が認識ないし経験的事実の思惟的整序であることは、いうまでもない。